

編集後記

▼平成九年に別府大学大学院文学研究科歴史学専攻が創設された年に「修士論文作成に向けての一里塚」という信念のもとに『院生報告抄』が刊行（平成一〇年）された。しかし『院生報告抄』は諸般の事情によって休刊となっていた。今回刊行する『ゆけむり史学』は、当該報告抄の休刊直後から本学大学院文学研究科歴史学専攻において在籍学生や先輩諸氏が定期的に日本史・東洋史・西洋史の合同によって開催していた院生報告会の成果報告である。つまり『ゆけむり史学』は『院生報告抄』の後継雑誌としての性格を有する。▼『ゆけむり史学』は、平成一六年に真弓雄三氏（平成一六年度修了）によって『院生報告抄』の復刊として発案命名された。その後福永素久氏（平成一七年度修了）が計画を進められ、今回私が任を引き継ぐかたちとなった。当時大学院で世話役を仰せつかっていた私にとつては正直、大変厄介な仕事を抱え込んでしまったという気持ちがあったが、不可能とは思わなかった。理由は、過去に約三〇回分の報告を先輩諸氏は連続と続けられておられた。よって、刊行するのに必要にして十分な量を蓄積していたことにある。この場を借りて先輩諸氏に感謝を申し上げたい。▼そこで、先輩方が進められた計画に基づいて『ゆけむり史学』をなにごんでも復刊するべく方々へ意見を求め、足も運んだ。その結果、私たちが今回刊行する『ゆけむり史学』は、院生報告会の報告を文章化することに努め、紙数の制限を緩やかにした。したがって論文・研究ノート・史料紹介などの区分は、便宜上の名称であり『ゆけむり史学』自体が同人誌のような性格を帯びていることは否定できない。しかし『ゆけむり史学』が、後々になって本学大学院生間の交流を目的とする同人誌から、大学院間の交流と院生報告会への様々な方々のご参加を促す学術雑誌へと移行してくれることを切に希望している。▼同人誌から学術雑誌へと大きなことをいつた割には、体裁がととのっていないなど難点も多々あることであろう。しかし今後『ゆけむり史学』の刊行を続けていくうちに体裁も内容も洗練されてゆくことであろう。『ゆけむり史学』は、本学大学院生が自身の研究の成果と報告の蓄積を文章にして外に発するのための練習という性格も持つ。私は『ゆけむり史学』という器を作った者に過ぎない。以降は後輩諸君が、この器を発展させてくれるものと確信し、今回の刊行のはこびとなった。▼なお、平成一八年の『ゆけむり史学』は多くの院生諸君・諸先生方からの賛同を得た。まず、このことに感謝を申し上げたい。日本史・東洋史・西洋史の院生諸君からも多くの賛同を得たが、投稿とはならなかった方々も少なくない。平成一九年になって編集を始めた私の急ぎ働きに責任があるものと感じている。ついで、このことにお詫びを申し上げたい。

（文責 橋本賢一）

（執筆者紹介）

- | | |
|-------|-------------------------|
| 田村 憲美 | 別府大学大学院文学研究科教授 |
| 川井 貴雄 | 別府大学大学院文学研究科博士前期課程二年 |
| 木村 太陽 | 別府大学大学院文学研究科博士前期課程二年 |
| 中川 佳奈 | 別府大学大学院文学研究科博士前期課程一年 |
| 福永 素久 | 藍住町教育委員会嘱託職員 |
| 田辺 龍弥 | （別府大学大学院文学研究科博士前期課程修了生） |
| 橋本 賢一 | 別府大学大学院文学研究科博士前期課程一年 |
| 串間 聖剛 | 別府大学大学院文学研究科博士前期課程二年 |
| 松尾 卓次 | 別府大学大学院文学研究科博士前期課程二年 |
| 佐藤 紘一 | 別府大学大学院文学研究科博士前期課程二年 |
| 中野 正裕 | 別府大学大学院文学研究科博士前期課程二年 |
| 舌間 誠子 | 別府大学大学院文学研究科博士前期課程二年 |
| 荒尾 裕治 | 別府大学大学院文学研究科博士前期課程二年 |
| 中川 祐志 | 別府大学大学院文学研究科研究生 |